

# 多人種都市ロサンゼルスと環太平洋の想像力

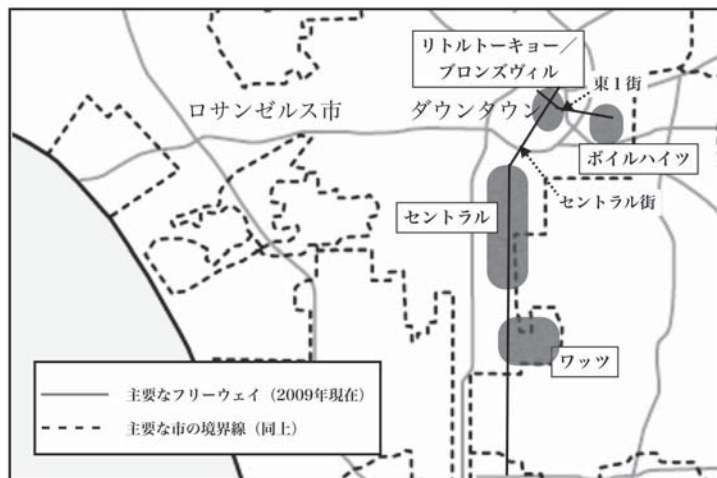
——リトルトーキョー／ブロンズヴィルの経験から——

南川文里

## はじめに

ロサンゼルス（以下、LAと表記する）は、早い段階から、アメリカ生まれの白人、ヨーロッパ、メキシコ、アジアからの移民、黒人など、国内外からの移住者が集まる多人種都市であった。20世紀初頭に労働移民を中心に北米地域へと活動範囲を拡大していた日本人移民にとっても、LAは主要な目的地の一つになり、これらの多様な人々と生活空間を共有することになった。それは、20世紀前半に環太平洋という規模で膨張しつつあった日本人の世界と、「移民の国」「多人種社会」としてのアメリカとの遭遇であった。

LAダウンタウンのリトルトーキョーと呼ばれる地区は、20世紀初頭に日本人移民が集まる場として登場し、現在でも在米日系人社会の中心として広く知られている。しかし、日系人が強制収容された戦時中、この地区は、多くの黒人が流入したため、ブロンズヴィル（Bronzeville）と呼ばれていた。戦争を挟んだリトルトーキョー／ブロンズヴィルの経験は、「環太平洋日本人世界」がLAの日本人移民・日系人社会をどのように支えたのか、戦争を通して動揺から崩壊に至る過程が、LAの人種エスニック関係、とくに日系人と黒人のあいだの関係をどのように変えたのかを物語る<sup>1)</sup>。本論文では、環太平洋をめぐるトランスナショナルな想像力と移住地における人種エスニック関係の再編を、リトルトーキョー／ブロンズヴィルの経験から考えたい<sup>2)</sup>。



**地図** 20世紀前半のLAにおけるおもな日系人・黒人の居住地区。セントラルとワッツは黒人が集中した地区。ボイルハイツは、ユダヤ系、日系、メキシコ系などが住んだ多人種地区として知られる。市の西側は制限約款に守られた白人地区であった。

## 1. 「環太平洋日本人世界」イメージの崩壊

LAは、1900年頃から日本人移民の主要な目的地の一つになり、日本からの新規移民が停止する1924年までに在米日本人社会の中心地となった。1930年にLA市内の日系人口は2万人を超え、1940年までにアメリカ生まれの第二世代が日系人口の半分以上を占めるようになった。LAダウンタウンの東1街周辺に出現したリトルトーキョーは、南カリフォルニアでの小規模農業、沿岸部の漁業、都市部の商業などの日本人移民の経済活動の中心であった<sup>3)</sup>。

LA在住の日本人移民は、移住先への適応過程においても、日本人世界の海外膨張の言説を取り込み、独自のアイデンティティ定義を編み出した。たとえば、1910年頃から激化した日本人移民排斥運動に直面したLA日本人社会の指導者たちは、アメリカの価値観や習慣を積極的に取り入れる「米化」を宣伝することで、「排日」の動きを沈静化させようとした。その際、移民指導者は、アメリカが世界各国からの移民によって構成される「移民の国」であることをふまえ、日本人は「非白人」であっても、欧米列強と肩を並べる「文明民族」であるがゆえに、他のヨーロッパ系移民と同様に、「米化」してアメリカ社会の構成員となることが可能であると訴えた<sup>4)</sup>。

このような「民族」主義にもとづく「米化」論の発想は、満州事変後の日本の植民地主義的な膨張主義とも容易に結びついた。1930年代後半のLAの日本語新聞は、日本のアジア諸国への侵出を支持する論説を次々と掲載し、日本人会は日本へ支援物資や慰問金を送る活動に取り組んだ。そのような活動の一方で、日本人移民は、LA現地のメディアや政治家に対し、東アジア情勢と日本政府の立場に対する「正確な理解」を求めて、パンフレットを配布するなどのプロパガンダ活動にも力を入れた。このような活動を支えていたのは、在米日本人も海外への「民族発展の先駆者」として「八紘一宇」の理想に貢献するべきであるという膨張主義の論理と、「合法的に入国した永住民」「米国市民の親」として「日米親善」に努めるべきであるというアメリカ社会の構成員としての立場からの主張であった。LAの日本人社会を「環太平洋日本人世界」と位置づける世界観は、排日家が危惧したような「黄禍」や「侵略」というよりも、日本人が多民族による文明社会アメリカの一員として地域社会の発展と日米親善の実現に貢献することと結びついていた。ここに見られるのは、植民地主義的な「民族」の論理を、移住先地域の文脈において読みかえるという移住者に特有の想像力の動きである<sup>5)</sup>。

しかしながら、「環太平洋日本人世界」の想像力は、1941年12月7日（アメリカ時間）の真珠湾攻撃によって、突然その土台を失うこととなった。日本人移民が生きてきた場所は、日本とアメリカという二つの社会の間にある「空白地」ではなく、アメリカ合衆国という国家的枠組の内側にあった。そのような場所で、日本人移民が自らを「環太平洋日本人世界」に位置づけるためには、彼らの活動が日米両国の「親善」や「平和的關係」に貢献するものであることを示す必要があった。そのような時代状況ゆえに、日本人移民は戦争プロパガンダ体制下にある日本発のメディア情報に依存しながらも、その限られた情報源から「東アジア情勢の平和解決」や「日米戦争は起こりえない」ことを現地のメディアや政治家に対して訴えたのである。しかし、戦争の勃発は、日本人移民の諸活動やアイデンティティが依拠してきた前提を底抜けにしてしまった。敵／味方の二分法をもとに社会統合をはかる戦争状態へと突入した国家の内側では、日本人移民および日系人は、膨張主義的な「民族」論を積極的に受けとめることができなくなっ

た<sup>6)</sup>。

また、日米戦争は、「環太平洋日本人世界」のイメージだけでなく、実際にアメリカ西海岸の日本人社会の制度的基盤も破壊した。1942年2月以降、合衆国政府は西海岸諸州に居住する日本人移民および日系市民に対し、内陸部に設置された収容施設へ移動するように命じた。市民権の有無にかかわらず、日本に出自を持つ「敵性外国人 (enemy alien)」2万人が、この強制移動の対象となってLAを去った。このようにして、約半世紀の年月をかけて作られたリトルトーキョーは、戦争勃発から数ヶ月の間にゴースタウンと化したのである。

「敵性外国人」として収容された在米日本人にとって、「環太平洋日本人世界」との同一化は「反アメリカ主義」や「枢軸国派」を意味するものになった。アメリカ市民としての忠誠を強調した二世団体日系アメリカ市民協会 (JACL) のリーダーたちは、反枢軸委員会を結成し、日系人社会内部における「枢軸国派」を一掃するべく、FBIなどに協力した。そして、日系人社会が大きく揺らぐなか、収容所で行われた忠誠登録では、多くの移民一世がアメリカへの忠誠を主張し、一部の「反アメリカ主義者」は、特定の収容所に隔離された。戦時強制収容とは、「環太平洋日本人世界」のイメージを支えてきた制度的基盤やアイデンティティ言説を覆し、在米日本人・日系人に「アメリカ市民」として愛国主義的なシヴィック・ナショナリズムへの同一化を迫る出来事であった<sup>7)</sup>。

## 2. ブロンズヴィルとリトルトーキョー

### ブロンズヴィルの出現：太平洋世界に現れた「南部」

太平洋戦争は、日系人の強制移動に加えて、多人種都市LAを揺るがすもう一つの大移動を引き起こした。戦争景気による需要の増大と労働力不足のなか、ミシシッピやルイジアナなどの南部諸州から多くの黒人が、寛容な人種関係と豊かな職業機会を求めて南カリフォルニアへと押し寄せた。LAには、ピークの1943年6月だけで1万人以上の黒人が流入し、1940年代末には市内の黒人人口は15万人に達したと言われた。とはいえ、LAには、戦前から黒人や日本人など特定の集団の住宅所有を制限する制限約款 (restrictive covenant) によって居住隔離が成立していたため、多くの黒人移住者が、戦時中に主を失った旧リトルトーキョーの商店や住宅を新たな生活の場とするようになった<sup>8)</sup>。

戦争が契機となった二つの大移動の結果、旧リトルトーキョーは、「黒人の活動の中心」としてブロンズヴィルという新しい名前を獲得し、近隣には「ここはブロンズヴィルだ。われらの成長を見よ！ (This is Bronzeville. Watch us grow!)」と書かれた看板が掲げられた。ブロンズヴィルに集まったナイトクラブにはチャーリー・パーカーなど数多くの黒人ミュージシャンが出演し、新しい黒人音楽文化が胎動した。しかしながら、ブロンズヴィルに対する人々の関心は、そのポピュラー文化よりも、貧困、不衛生、犯罪などの負の側面に集中した。戦前のリトルトーキョーを知る人物は、当時のブロンズヴィルには「アル中や酔っぱらい」があふれ、「最悪で汚らしい下層階級の」場所になってしまったと回顧している。また、市警察幹部は、旧リトルトーキョーでの犯罪件数は、戦争開始後3年で50%増加したと報告し、住宅局長はそこを「過密で衛生的な施設を欠いた黒人ゲットー (Negro ghetto)」と表現した<sup>9)</sup>。

本論文において注目したいのは、ブロンズヴィルの問題を、LAにおける人種主義や貧困よりも、南部という別世界から移住してきた人々が持ち込んだ文化や習慣に求める傾向があったことである。LAでは、大戦中に流入した南部出身の黒人は、戦前期からLAに住む黒人層とは異なった存在として扱われた。たとえば、副市長のオーヴィル・コールドウェル (Orville Caldwell) は、「ここで生まれ育った黒人は私たちと同じような考えをもっているが、これらの南部の黒人は深刻な問題となっている。彼らは、ここで生まれ育った黒人とも白人ともうまくやっけていけない」と両者の違いを強調している。たしかに戦前期の黒人住民は、自営業者を中心に比較的安定した経済状況にあり、1942年にLAで全米有色人種向上協会 (NAACP) の大会が開かれたときも、セントラル街を中心としたビジネスの成功と黒人ミドルクラスの存在が強調されていた。新しい大移動は、このような既存のLA黒人層とは異なった、都市的生活様式を欠いた貧しい南部黒人の流入と解釈された。それは、ジム・クロウ (Jim Crow) と呼ばれた南部の人種隔離制度を太平洋岸に持ち込み、LAにもシカゴやニューヨークに見られるような「黒人ゲットー」の問題を引き起こすものであると考えられた<sup>10)</sup>。

太平洋岸と南部という対比は、LA生まれの黒人たちにも共有されていた。LAで発行された黒人新聞『カリフォルニア・イーグル』によれば、地域の黒人リーダーたちは、「高まる人種摩擦の原因は戦時中の黒人と白人双方の南部からの移住であると見なしている」とした。記事では、NAACPの地方幹部が「南部白人が偏狭で歪んだ人種偏見をこの地にもたらし、南部黒人もこの状況を変えられない」と語り、大移動と黒人やメキシコ系に対する人種差別を結びつけている。実際、大移動のピークであった1943年にはメキシコ系を標的にしたズートスーツ暴動が起き、黒人を含む多くの住民がLAでの白人優越主義の拡大を感じとっていた。このような不安のなかでLAに出現した「黒人ゲットー」は、多人種都市LAにおける人種関係の深刻化や複雑化の象徴と考えられた<sup>11)</sup>。

### リトルトーキョーの「再建」と人種間協調主義

在米日本人・日系人の強制収容所から西海岸への再定住は、黒人人口の急増で人種問題への不安が高まっている中で生じた。日系人の再定住が、LAにおける住宅・雇用不足を深刻化させるのではないかという懸念が広まっていたため、戦前と同様の人種主義的な日系人排斥論もしばしば見られた。しかし、1945年に日系人の再定住が始まると、東1街周辺の地域は、急速に「日系人の町」リトルトーキョーとしての顔を取り戻した。『ロサンゼルス・タイムズ』は、再定住が始まって半年で「リトルトーキョーはかつての活動の兆しを見せている」と報じ、後に『南加州日本人史』は、1947年末までに「黒人や他人種をほとんど駆逐」してリトルトーキョーの「奪還」と「再建」を果たしたと描いた。ここで注意すべきは、人口統計学的には黒人や他人種は完全に「駆逐」されたわけではなく、リトルトーキョーの日系人は依然として人口上のマイノリティであったことである。再定住から5年後の1950年におけるリトルトーキョーを中心としたセンサス地区の人口構成を見れば、メキシコ人を含む白人が40%、黒人が38%を占め、日系人を含む「その他の人種」の割合は22%に過ぎなかった。この地区は実質的には多人種であり続けたにもかかわらず、その象徴的なイメージは、ブロンズヴィルからリトルトーキョーへと再移行した。これは何を意味しているのであろうか<sup>12)</sup>。

まず、戦前から戦後にかけて、日系人をめぐる社会的課題に重大な変化が生じていた。戦前の「日本人問題」は、日本人・日系人を「敵性外国人」と呼び、その「侵略」や「破壊活動」への脅威を強調していた。しかし、再定住期になると「問題」の焦点は、「アメリカ市民」としての日系人の社会的再統合へと移行した。この新しい問題枠組のもとでは、日系人は強制収容への協力や戦場での犠牲を通してアメリカへの忠誠心を証明した「市民」であり、各人種集団が協調して「日系アメリカ市民」のコミュニティへの再統合を支援するべきであると考えられた。ここでは、このような立場を人種間協調主義（interracialism）と呼びたい。人種間協調主義は、連邦政府や LA 市当局だけでなく、リベラルな知識人やキリスト教団体、各人種エスニック団体にも幅広く共有され、日系人が他のアメリカ市民と同様に元々住んでいた場所へと戻ることが、市民生活への再統合の第一歩であると強調した。この場合、日系人が以前の居住地に戻るということは、ブロンズヴィルの黒人住民に対して、商業施設や住居を日系人へ「返還」し、そこを立ち退くことを求めることでもあった。実際、本願寺ビルをはじめとする多くの施設が黒人から日系人の手に戻された<sup>13)</sup>。

一方、日系人側も、人種間協調主義のなかにあった「白人側の期待」を強く意識していた。リトルトーキョーへと戻ってきた日系人は、高騰する賃貸料を確実に支払うだけでなく、「戻ったら、そこをきれいに掃除し、花を植え、外見が美しく見えるように改善しました」と、ある商店主の妻が述べたように、店舗や住宅の周辺を清潔に保ち、景観の美化に貢献することを強調した<sup>14)</sup>。日系人が「よい借り手」「よい隣人」であるというアピールは、ブロンズヴィルにおいて問題視されていた賃料の滞納や不衛生な環境を意識したものであった。人種間協調主義は、「日系アメリカ市民」として日系人の再統合を支援する動きであったが、日系人側も「アメリカ市民」にふさわしいとされる生活水準をリトルトーキョーに実現しようと努めた。その確実なアピール方法は、「貧困」「不衛生」「犯罪」「黒人ゲットー」などの言葉で表現されたブロンズヴィルを、堅実かつ精力的な企業家を中心としたリトルトーキョーへと置き換えることであった。

以上のように、日系人の再定住は、人種間協調主義という、日米戦争後の新しい人種関係のあり方を体現するプロジェクトとなった。そこでは、リトルトーキョーの「奪還」や「再建」は、帰還した日系人が、模範的な「アメリカ市民」として「荒廃」したブロンズヴィルを立て直すことも意味していた。それでは、「忠実なアメリカ市民」という立場を強調した日系人は、黒人住民とどのような関係を築いたのであろうか。次節で考えたい。

### 3. 環太平洋の想像力と人種エスニック関係

#### 人種間協調主義をめぐる緊張

日系人の再定住に対して、LA 黒人からも「ここは日系人のホームであり、彼らには戻る資格がある」というように人種間協調主義に共鳴する声が上がっていた。黒人新聞は、戦争中に「忠誠心を証明した」日系人の帰還によって、カリフォルニアが「あらゆる人種、肌の色、信条を持つ人々が共に暮らす民主的な州」となることの重要性を強調し、その人種間協調の実現に「世界の視線が集まっている」と主張した。実際に「各人種の寄り合ひ世帯である」リトルトーキョー／ブロンズヴィルの治安問題や繁栄策を、LA 市当局と日系人・黒人の各団体が協調して進める

動きも見られた。このように、黒人住民側は、人種間協調主義による日系人の再定住を「ブロンズヴィル問題」を含む LA の人種問題を解決する好機ととらえていた<sup>15)</sup>。

しかし、リトルトーキョーの「再建」がすすむにつれて、黒人住民と日系人の間での意識や関心のずれが次第に表面化した。まず、黒人住民の側の主要な関心は、制限約款に代表される人種主義的な制度を撤廃させる反人種主義 (anti-racism) 運動にあり、日系人はそのためのパートナーとして期待されていた。しかし、日系人の側の関心は、反人種主義というよりも、もっぱらリトルトーキョーの「再建」にあった。日系人社会内部では二世の指導者や企業家が台頭する「新陳代謝」が起きており、新しい世代のリーダーたちは、人種間協調主義の理想のもとで、「市民」としての LA 地域社会への統合と、日系コミュニティの経済的再生にエネルギーを注いだ<sup>16)</sup>。

このような黒人と日系人のあいだの関心のずれを如実に反映したのが、ピルグリム・ハウスと呼ばれた施設の立ち退きをめぐる事件であった。ピルグリム・ハウスは、1943年にハロルド・キングスレー (Harold R. Kingsley) 牧師らによってブロンズヴィルに設立され、「人種に関係なく」住宅問題や非行問題に取り組んできた。黒人雑誌『エボニー』は、1946年にピルグリム・ハウスを再定住後の日系人と黒人の「統合 (unity)」を象徴する事例として紹介している。しかし、1947年の終わりに、日系人側は、ピルグリム・ハウスが入居していた建物を立ち退き、戦前の入居者であった日系ユニオン教会に返還するように求めた。キングスレーは、以前から「自分たちのボートを浮かばせる」ことにのみ熱心で黒人との連帯に消極的な日系人を批判していたが、LAの黒人メディアは、この申し出は「マイノリティとしての共感」を欠いた日系人が「マジョリティがマイノリティを惑わす悪しき行いに手を貸すもの」だと厳しく批判した。このような批判に対して、日系ユニオン教会の幸田宗平牧師は、日系人は「辛抱強く平和的に建物の返還を3年間待ち続けてきた」と日系人側の権利を主張し、黒人側の理解を求めた<sup>17)</sup>。

結局のところ、ピルグリム・ハウスをめぐる対立は、日系人側と黒人側のあいだにある、再定住と人種間協調主義をめぐる認識のずれから生じたものであった。黒人住民は、日系人の再定住を反人種主義運動の好機ととらえ、戦後 LA 社会における白人優越主義の克服というヴィジョンを提示したが、日系人側は反人種主義に対しては消極的な態度であり続けた。では、このような相違はなぜ生じたのであろうか。この認識のずれを説明するには複雑で周到的な議論が必要であるが、既存の議論に欠けているのは、当時の日系人や黒人の人種エスニック関係の認識に、環太平洋レベルでの想像力のあり方がいかに作用したのかという問いである<sup>18)</sup>。「環太平洋日本人世界」の崩壊を経験した LA 日系人にとって、戦後のリトルトーキョーは、どのような場所でなければならなかったのか。黒人住民にとって、日系人との共闘とはどのような意味を持っていたのか。

### 環太平洋の想像力とすれ違う戦略

「環太平洋日本人世界」のイメージは、戦前期の LA 日本人および日系人にとって、そのアイデンティティ定義を支える土台となっていた。それゆえ、日米戦争によるそのイメージの崩壊は、日系人社会にとって決定的な転換点となった。日本人移民および日系二世にとって、強制収容と忠誠登録とは、日本とアメリカのナショナルな言説を排他的に二分したうえで、忠誠心を行

動で証明することを求める愛国主義的なシヴィック・ナショナリズムへの同一化を求める経験であった<sup>19)</sup>。そのような過程を経てLAへ戻った日系人にとって、リトルトーキョーは、もはや「環太平洋日本人世界」のフロンティアではなく、「アメリカ市民」として戦後世界を生き抜くための政治的・経済的な基盤となった。法外と言われるほど高騰した賃料を支払い、景観や衛生条件の改善に努める日系人の姿は、不動産を所有する白人層から見て望ましい市民像を体現することでアメリカ社会への統合を目指す態度を反映していた。

このような再定住期の日系人社会のなかでは、戦前の「在米日本人社会」が「帝国日本」「(日本の)民族主義」と同一化したことを批判する言説が主流となった。戦後に帰米した二世の麻野幹夫は「戦前日本」が「一等国であると己惚れていた認識不足が遂に今日の如き結果を招いた」と述べ、戦前の日本のあり方を厳しく批判した。また、やはり帰米でJACLに属していたフランク・イワセは、「あまりに日本民族の優秀を信ずる結果、他へ同化するだけの闊達さがな」かった「在米日本人社会」は「恰もファショ日本、軍部日本の出島の観を呈」したと主張し、懸賞雄弁大会で優勝した。このように、日本語での言説圏でさえも、戦前の「日本人世界」との断絶が強調されていた。もはや、LA日系人社会にとって「環太平洋日本人世界」との連続性は否定されるものでしかなかった。アイデンティティ言説の土台としての「日本」を喪失した日系人にとって、アメリカ社会に「市民」として受け入れられることこそ最優先であり、人種間協調とは「アメリカ市民」としての忠誠心を共有する集団による協力関係以上の意味を持たなかった<sup>20)</sup>。

一方のLA黒人のあいだでは、「有色人種」でありながらも環太平洋世界の一大勢力となった「日本」に対する期待は、20世紀初頭から存在していた。1914年の『カリフォルニア・イーグル』は、ニューヨークの安達金之助による「日本は有色人種の権利のための戦いを率いる」と題した記事を掲載し、日露戦争以後の東アジア圏における日本の台頭を、白人支配に対抗する新たな「創世記」として紹介している。戦前期のLA黒人のあいだでは、そのような「有色人種」対「白人帝国」という世界観をLAの農業や自営業における日本人移民の成功に重ね、「有色人種」としての新たな戦略を模索する動きがあった。その結果、シカゴやニューヨークなどの北部都市や厳しい人種隔離制度が存在した南部地域とは異なった独自の人種意識が育まれていた<sup>21)</sup>。

その後、日米戦争開戦当初こそ、日本人を「アメリカ黒人の友人ではない」と見なす動きもあったが、強制収容の実態や日系二世兵士の活躍が広く知られるようになり、実際に多くの黒人兵士が太平洋を越えた戦闘や占領を経験すると、「日本」に対する印象も大きく変わった。たとえば、ある元黒人兵は、占領期の日本体験を振り返って、日本人の「謙虚さ」「儉約と勤勉」によって「いかなる敗戦国よりも急速な復興を遂げている」と賞賛した。また、LAに帰還した黒人兵は、「白人は日本人を心から憎んでいたが、自分たちはそうは思わない。同じ有色人種としていがみ合う理由もない。彼らは黒人のやり方を気に入ったし、リトルトーキョーで日本人が店を開くなら黒人はいい客になる」と、日本での体験がアメリカ日系人への友情を導いたと語った。さらに、黒人メディアは、反人種主義運動を、LAというローカルなレベルの人種問題に対峙するだけでなく、「白人優越主義」という「世界的害悪」に脅かされた「世界のブラック、ブラウン、イエローの人民」に共通の闘争というイメージでも描いた。このように、黒人側は、自身の戦争や占領経験にもとづいて、太平洋を越えた有色人種間の連帯を想像し、その想像力をLAにおける反人

種主義運動，白人優越主義に対する闘争の推進力へと結びつけようとしたのである<sup>22)</sup>。

以上のように，日系人と黒人における環太平洋の想像力の齟齬が，再定住期 LA における日系人と黒人のあいだの人種間摩擦を引き起こす一因となった。日系人は，「環太平洋日本人世界」との断絶の結果，愛国主義的なシヴィック・ナショナリズムとの同一化を図り，「模範的なマイノリティ」としてリトルトーキョーの再建へと没頭した。黒人側は，戦前の「有色人種の帝国」イメージと，戦中・戦後の「日本」および「日本人・日系人」体験を重ね合わせながら，反人種主義運動のための共闘を期待した。換言すれば，日系人は，トランスナショナルな言説的根拠を失ったことから，市民としてのナショナル／ローカルな統合という戦略を選ばざるをえなかったが，LA 黒人は，ローカルな人種主義の克服を，トランスナショナルなイメージを動員することで喚起される有色人種間の連帯に託そうとしたのである。

最後に指摘しておかなくてはならないのは，日系人，黒人双方が LA の戦後の人種エスニック秩序のなかで自身の立場を模索する過程において，ブロンズヴィルとそこに住んだ南部黒人の記憶が軽視されるようになったという点である。実際には，多くの黒人がリトルトーキョー／ブロンズヴィルに住み続けたにもかかわらず，そこは黒人コミュニティではなく「日系人の町」として再び広く認知されることとなった。黒人の側でも，1940年代後半には，戦前から黒人が多く住んでいたセントラル街やワッツこそが黒人コミュニティと考える傾向が顕著になったが，その背景には，南部出身の黒人移住者を中心としたブロンズヴィルにコミュニティとしての正統性を認めない態度があった<sup>23)</sup>。リトルトーキョー／ブロンズヴィルにおける多人種コミュニティとしての豊かな歴史的経験は，LA の都市空間に二つの異なった「エスニック・コミュニティ」を喚起する過程において忘却されたのである。

## おわりに

リトルトーキョーは，北米本土への日本人の国際移動が生み出した最大の遺産といえる。そこには，現在，全米日系人博物館や二世兵士の忠誠心を称える「当たって砕けよ (Go For Broke)」記念碑など，再定住後の「日系アメリカ市民」としての歴史的記憶を喚起するとともに，高度経済成長後に進出した日本人企業駐在員や日本人観光客向けの施設が集まる場所となっている。強制収容後の「日系アメリカ人」は，エスニックな出自としての日本を意識しながらも，戦前の「環太平洋日本人世界」の想像力を廃し，「アメリカ市民」としての承認と統合を求めてきた。一方で，高度経済成長を遂げた経済大国として太平洋世界に再登場した日本も，移民と膨張的民族主義に支えられた戦前の「環太平洋日本人世界」とは断絶したものとしてイメージされている。今日のリトルトーキョーの風景は，「日系アメリカ人」と「経済大国日本」という二つの切り離された物語を象徴するものであるといえる。おそらく，戦前の「環太平洋日本人世界」の想像力を批判的に検証することを通して二つの物語を統合し，LA における「ジャパニーズ」の包括的な歴史を構想することも可能であろう。しかし，そのようなリトルトーキョーの物語は，ブロンズヴィルをはじめとする多人種地区としての歴史的記憶をさらに深く忘却することを意味する。リトルトーキョー／ブロンズヴィルの経験とは，越境日本人の移動を統合された「大きな物語」として描くことの危うさを示唆するものでもあるのだ。



注

- 1) 多人種都市 LA の人種エスニック関係における在米日本人・日系人の経験を議論したものとしては、以下のものが挙げられる。Kariann Akemi Yokota, "From Little Tokyo to Bronzeville and Back: Ethnic Communities in Transition," (M.A. Thesis, Asian American Studies, University of California, Los Angeles, 1996); Daniel Widener, "Perhaps the Japanese Are to Be Thanked?: Asia, Asian Americans and the Construction of Black California," *positions*, 11:1 (2003): 135–181; 松本悠子『創られるアメリカ国民と「他者」:「アメリカ化時代」のシティズンシップ』（東京大学出版会, 2007年）; 南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学: エスニシティ, 人種, ナショナリズム』（彩流社, 2007年）; Scott Kurashige, *The Shifting Grounds of Race: Black and Japanese Americans in the Making of Multiethnic Los Angeles* (Princeton: Princeton University Press, 2007)。
- 2) ここで、環太平洋の想像力 (transpacific imagination) とは、移住者が太平洋というトランスナショナルな想像世界のなかに自身を位置づけ、その立場から既存のローカル／ナショナルな言説を柔軟に解釈する現象を指す。M・F・ジェイコブソンは、ヨーロッパ系移民が移動者の立場から出身国のナショナリズムを解釈する過程を、ディアスポラの想像力 (diasporic imagination) と呼んだが、環太平洋の想像力とは、出身国への帰属意識だけでなく、太平洋を越えるという経験（あるいは疑似体験）にもとづいたリージョナルな想像力と、移住者の言説世界との関係を重視している。Matthew Frye Jacobson, *Special Sorrows: The Diasporic Imagination of Irish, Polish, and Jewish Immigrants in the United States* (Berkeley: University of California Press, 2002[1995])。日系移民史における見学団や帰米二世の経験は、環太平洋の想像力がいかに構成されたのかをめぐる重要な事例であると言える。Yuji Ichioka, *Before Internment: Essays in Prewar Japanese American History* (Stanford: Stanford University Press, 2006)。
- 3) U.S. Bureau of the Census, Department of Commerce, *Sixteenth Census of the United States 1940: Population Vol. II, Characteristics of Population* (Washington D.C.: Government Printing Office, 1943), 630; 矢ヶ崎典隆『移民農業: カリフォルニアの日本人移民社会』（古今書院, 1993年）。
- 4) 南川『「日系アメリカ人」の歴史社会学』, 128–132頁。
- 5) Yuji Ichioka, "Japanese Immigrant Nationalism: The Issei and the Sino-Japanese War, 1937–1940," *California History*, 69 (1990): 260–275; 藤岡紫朗『米国中央日本人会史』（米国中央日本人会, 1940年）, 334–335, 397頁; 『羅府新報』1937年9月16日; 『南加ガーデナ連盟月報』1937年8月10日; 1937年10月10日 (Box 5, Karl G. Yoneda Papers, UCLA); Togo Tanaka, "Political Organizations," n.d. (W.1.94, Japanese American Evacuation and Resettlement Study Records, UC Berkeley), II–7; 南川『「日系アメリカ人」の歴史社会学』, 146–151頁。このような考えは、二世に対して「日本民族」としての自覚を持つ「良き米国国民」であることを求める日本語学校の立場にも共通した（『羅府新報』1938年8月8日）。
- 6) 東栄一郎は、日本人移民を、二つの国民国家を超越したものではなく、国家的な枠組の影響から逃れられないものとする「国家＝間 (inter-National)」という視点を提示している。Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* (New York: Oxford University Press, 2005), 5.
- 7) War Relocation Authority, Community Analysis Section, "Army and Leave Clearance Registration at War Relocation Centers," 1943 (Box 55, Japanese American Research Project Collection, UCLA), 76–79.
- 8) Keith E. Collins, *Black Los Angeles: The Maturing of the Ghetto, 1940–1950* (Saratoga, CA: Century Twenty One Publishing, 1980), 18–19; Carey McWilliams, *Southern California: An Island of the Land* (Salt Lake City: Gibbs Smith Publisher, 1973), 325.
- 9) Charlotte Bass, *Forty Years: Memoirs from Pages of a Newspaper* (Los Angeles: California Eagle Press, 1960), 106; R. J. Smith, *The Great Black Way: L.A. in the 1940s and the Lost African American Renaissance* (New York: Public Affairs, 2006), 141; Yokota, "From Little Tokyo to Bronzeville and Back," 51; *Los Angeles*

- Times*, November 29, 1944, 7; *California Eagle*, August 5, 1943, 5\_B.
- 10) Collins, *Black Los Angeles*, 26; "California Calls," *Crisis*, May 1942, 153-157.
  - 11) *California Eagle*, April 4, 1946, 3. NAACPの幹部は、ズートスーツ暴動がイーストサイドからセントラル街まで拡大することを危惧していた (*California Eagle*, June 3, 1943, 1)。同年末にはLAで白人優越主義団体クー・クラックス・クランが活動を活発化しているという報告もあった (*California Eagle*, December 9, 1943, 16)。
  - 12) *Los Angeles Times*, September 8, 1945: A1; 越智道順編『南加州日本人史』後編(南加日系人商業会議所, 1957年), 399; U.S. Bureau of Census, *1950 Population Census Report*, Vol. 3, Chapter 28, *Census Tract Statistics Los Angeles, CA and Adjacent Area* (Washington, D. C.: Government Printing Office, 1952), 22.
  - 13) *Los Angeles Times*, December 31, 1944, 1; *Rafu Shimpo*, December 20, 1948, II-3. 人種間協調主義については、南川文里「リトルトーキョーの再建? : 再定住期におけるコミュニティと人種間協調主義」『アメリカ研究』35号(2009年): 136-139頁。
  - 14) Tom Sasaki, "Sasaki's Daily Report from Los Angeles," No.8, July 27, 1946 (W.2.11, Japanese American Evacuation and Resettlement Study Records, UC Berkeley), 2.
  - 15) Sasaki, "Daily Report," No. 83, September 16, 1946, 1; *California Eagle*, January 5, 1945, 7; 『羅府新報』1947年3月4日, 1, 3.
  - 16) Bass, *Forty Years*, 106-111; 南川「リトルトーキョーの再建?」, 141-143頁。
  - 17) "The Race War That Flopped," *Ebony*, July, 1946, 4-7; *Los Angeles Tribune*, March 8, 1947, 2; November 29, 1947, 1; December 6, 1947, 17; October 9, 1948, 8. ピルグリム・ハウス立ち退きの経緯については以下の文献を参照。増田直子「再定住期リトル・トーキョーにおける人種関係: 『ピルグリム・ハウス』の活動を中心に」『アメリカ・カナダ研究』22号(2004年): 99-116頁。
  - 18) この問題について、増田直子は日系人側の黒人に対する「他者」意識を、S・クラシゲは、強制収容のなかで日系人が政府権力に対して抱いた恐怖や無力感を一因として挙げている。増田「再定住期リトル・トーキョーにおける人種関係」, 110頁; Kurashige, *The Shifting Grounds of Race*, 183.
  - 19) 南川『「日系アメリカ人」の歴史社会学』, 180-184頁。
  - 20) 『羅府新報』1947年2月6日, 3; 1947年11月24日, 4.
  - 21) "Japan to Lead Fight For Rights of Colored Races," *California Eagle*, September 5, 1914, 1; Widener, "Japanese Are to Be Thanked?" 155-156; 松本『創られるアメリカ国民と「他者」』, 287-290頁。
  - 22) Benjamin E. Mays, "The Negro and the Present War," *Crisis*, May 1942, 160; Harry Paxton Howard, "Americans in Concentration Camp," *Crisis*, September 1942, 281-284; *Los Angeles Tribune*, January 10, 1948, 4; Sasaki, "Daily Reports," No. 83, 2-3; *California Eagle*, April 4, 1946, 7.
  - 23) 南川「リトルトーキョーの再建?」, 147-148頁。